

東日本大震災におけるビッグパレットふくしま避難所の取り組みから

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任准教授
富岡町生活復興支援おだがいさまセンター長
天野 和彦

1. はじめに

東日本大震災における福島県の状況は、震災から1年10ヵ月が経過した現在でも、多くの避難住民を抱え、生活の再建についても、未だ先が見えない不透明さを抱えている。加えて、原子力災害によって地域コミュニティを維持することなくバラバラで避難せざるを得なかったために、住民同士が結ばれることで築いてきた、いわば地域社会の基礎をなすコミュニティの仕組みを喪失するという状況も生んでいる。

また、現在の避難の枠組みとして、今までの災害には見られなかった「応急仮設住宅」「みなし仮設住宅」「県外避難」と三つのパターンに大きく分かれている。こうした状況がより混沌とした事態を生んでいると言わざるを得ない。

本稿では、そうしたコミュニティの基礎機能を喪失した長期避難中の被災住民の内、富岡町、川内村の住民が、発災時から約5ヶ月強過ぎた福島県郡山市に位置し、大規模避難所となった「ビッグパレットふくしま」避難所の運営現場での取り組みをとおして、避難所運営で大切な視点を明らかにしたい。

2. 学校避難所について

東日本大震災発災後、福島県の浜通りに位置する相馬市のある避難所に支援に入った私は、沿岸部の壊滅的な被害状況を目にした時、我が目を疑った。戦争経験のない私であるが、以前教科書などで見たことのある、戦争で焼け野原になった光景を彷彿とさせるようなそんなありさまに見えた。

その光景を目にしながら、私はある一文を思い出していた。それは公民館の生みの親とも言われている「寺中作雄」の一文だった。1946年当時、文部省公民教育課長だった寺中作雄は、その著書『公民館の建設』の中で次のように記している。

「この有様を荒涼と言ふのであろうか。この心持を索漠と言ふのであろうか。目に映る情景は、赤黒く焼けただけた一面の焦土、胸を吹き過ぎる思ひはかぜの如くはかない一聯の回想。焼けトタン小屋の向ふに白雲の峰が湧き、崩れ壁のくぼみに夏草の花が戦っている。これが三千年の伝統に輝く日本の国土の姿であらうか。（後略）……」

まさに、混沌とした被災地の状況は、それをまざまざと想起させるものだった。

筆者が当初、派遣されていたのは海沿いから2kmほど離れていた、ある小学校の避難所だった。今回の災害で、学校に設置された避難所で、運営が成功したところとそうではなかったところと二つに分かれた状況を見てきた。筆者がいた避難所は、地域住民と良好な関係を持って運営されていた避難所であった。しかし、なぜそのように二つに分かれてしまうのか。

端的に言えば、それは地域に開かれた学校であるか否かである。文字通り、地域コミュニティの中核施設としての位置づけを持った学校は、今回の震災時に避難所として大きな力を発揮していた。それは生涯学習の視点から始まった、学校開放などの諸施策による学校側の意識の高まりが前提としてあり、

そうした施策が功を奏したといえると考えている。以下、学校が避難所としてなぜ適しているのかそれぞれの適する理由を羅列的に挙げてみたい。

◆ハード上のメリット（学校施設）

- ・スペースの広さ
- ・トイレの数
- ・視聴覚室や家庭科室などの避難生活に欠かすことのできない特別教室の存在
- ・応急的医療を行える保健室
- ・暖房等の完備

◆ソフト上のメリット（災害時における教員の役割）

- ・運営側の教員は組織的な動きが可能であること。（いい意味でのヒエラルキー集団）
- ・非常時における日常的な訓練を行っている。
- ・日常的に地域から教育活動にボランティア等を受け入れている。
- ・教員自身が各分野の専門家である。
- ・自治的組織作りは教育活動と不可分である。（義務教育諸学校における学級活動等）
- ・情報提供活動も日常的に行っている。（学校通信発行や情報の掲示、校内放送など）
- ・体操やレクリエーションは教育活動で行っている。

以上のように、学校は、ハードの面からもソフトの面からも、もともと避難所として適すると考えている。ただし、それは学校が、教職員が、非常時にはそういう役割を果たすという使命感をもっているということがあくまでも前提になることはいうまでもない。これらのことから、日常的に災害時における学校の役割を明確にしていくことが求められているといえる。

3. ビッグパレットふくしま避難所における運営支援の実際

筆者は、相馬の小学校避難所の運営支援の後、4月11日に「ビッグパレットふくしま」というコンベンション施設に開設された大規模避難所の県庁常駐チームの責任者として配置された。そこにおける取り組みはまさに社会教育的視点で運営を行ってきた。そもそも、運営主体でない県庁チームが、なぜ避難所に常駐のチームとして配置されたのか。それは、当時2,500名もの被災者が、震災の爪痕が色濃く残る施設内にひしめき合っていた、いわゆる「大規模避難所」であったことが理由としてある。また、被災者の中で30数名もの「ノロウイルス」の患者が隔離されるという状況を抱えた上に、風紀上の問題もいくつか発生していた。そうした混沌とした中で、緊急に支援が必要な状態にあった。はじめは、行政のミッションとして命を守るということが求められた。命を守る基礎データである避難経路図や避難所の名簿の整理も大事な仕事であった。そういう取り組みを優先して行い、入所者の区画整理のようなこともできてきた中で、少しずつ避難所内のベースが整い、全体として落ち着いていった。生命を守る基礎部分ができたことで、自治活動を促進して、被災者自身が運営に参画するという方向に軸足を移していこうかという段階に移行していった。

4. 交流と自治を基本的な視点に据えた取り組み

「交流の場の提供」と「自治活動の促進」が、被災者の命を守るということを阪神・淡路大震災の貴重な教訓から筆者自身学んではいたが、大規模避難所における自治はどうあればよいのか深く悩んでいた。少なくとも2,000名もの被災者をいくつかのグループに分けていくやり方は、自治ではなく管理であると考えていた。管理からは何も生まれないと。方向性が見えない中、中越における災害の経験から、サロン（喫茶）活動と足湯（傾聴ボランティア）の活動が有効だったと聞いて、中越の市民団体の支援を受けながらさっそく取り組みを始めた。避難所の開いたスペースにテーブルと椅子をおいてサロンの場はできた。しかし、物資にあったのはレギュラーコーヒーと銀色の口の細い専用の薬缶だった。スタッフが「どうやって使うのか」とためらっていると、中年の被災者が寄ってきて、黙ってコーヒーを煎れ始めた。すると、コーヒーの香りにつられて、「コーヒー、ご馳走してくれんのがい」と周りの被災者が次々と集まってきた。その後、無言でコーヒーをいれた方は、みんなから「マスター」と呼ばれるようになっていった。サロンは「みんなの喫茶・さくら」と命名され、「花の名前の喫茶店だから、花があったらいい」と花を買って飾ってくれる被災者がでてきたり、「マスター」の手伝いをする「仮マスター」や、汚れた床を掃除する者、紙コップだけじゃ味気ないと陶器のカップをたくさん買ってきて差し入れてくれる者など、自分ができることをそれぞれが出し合ってサロンを運営していく姿はまさに自治が形成されていく過程そのものであった。自分で気づき、参画していく。この過程こそ、自治なのだと言え、運営の側も気づき、学んでいった。サロンも「さくら」に加え「つつじ」、「つくし」と3号店まででき、被災者の大切な交流の場になっていった。（写真1 サロン「さくら」に集まる被災者）

5. 「おだがいさまセンター」の開所

こうしたサロンでの活動の経験から、交流の場を作ったり自治活動を促進したりするような仕組みを組織的、体系的につくり出すことが必要なのではないかと考え、生まれたのが「おだがいさま（福島の方言でおたがいさまのこと）センター」であった。この「おだがいさまセンター」は、これまでのボランティアセンターと性格が似て異なるものである。外部に支援の要請をして団体や機関、個人がボランティアでサービスを提供するというだけでなく、もう一方で内部、つまり入所者に向けて活動を働きかけ、交流の場を提供するところに特徴がある。例えば「喫茶を一緒に運営してみませんか」とか、おだがいさまFMという避難所内に設けられたラジオ局の「パーソナリティをやってみませんか」とか、「花をみんなで植えましょう」など、被災者が被災者にサービスを提供しあうという仕組みである。まさに「おだがいさま」精神に基づくものであった。（図1 おだがいさまセンターの仕組み）

6. ビッグパレットふくしま避難所で開催された夏祭り

4月下旬、最初に避難所内Bホールに自治会が生まれた。被災者から、様々な意見や要望がだされ、運営スタッフはそれらを正面から受け止めながら、みんなで掃除をしよう、ゴミ捨てをしよう、お湯くみにいこうなど自発的に取り組めるように提案もし、組織的に動いていくことができた。

そうした自主的な活動が順調に回っていくようになった6月上旬、あるエリアの自治会長が「おだがいさまセンター」に、「太鼓を用意してくれないか」という要望を出してきた。何に使うのか聞くと、「俺たちは、いつまで避難所にいられんたい？」と不安げに聞いてきた。そして、「新聞なんかで見ると、夏くらいには避難所はなぐなんだべ。そうしたら、みんなバラバラになんだべ。そうなる前に、みんなで最後に「相馬盆唄」で盆踊りを踊りたいんだ」と言った。思わず胸が熱くなった。ふるさとへの強い想いとふるさとをなくしたくないという両方の想いが重なった願いであった。災害は、人間の生活基盤

を丸ごと奪っていくということがこの出来事からもよくわかる。ビッグパレットふくしま避難所があった中通り地方の郡山には、その調べは流れないはずの浜通り地方の「相馬盆唄」。盆踊りは彼らにとってまさにふるさとそのものだったのだ。被災者も支援者も「絶対にやろう、成功させよう」と、さっそくおだがいさまセンターが中心となって呼びかけ、夏祭り実行委員会が結成されていった。

夏祭りは7月17日、その宵祭りの16日は子ども祭りとして、「福島こどものみらい映画祭実行委員会」の関係者の協力もあって、映画「忍たま乱太郎実写版」の大上映会があった。その翌日が、盆踊りだった。避難所の屋外展示場に櫓を組み、提灯がぶら下げられ、祭り半纏をまとった被災者が太鼓を叩き、相馬盆唄や川内甚句が歌われ、そして踊られた。1,500名を超える被災者が各仮設住宅などからも集まった。「来年もやりたい」という声が、会場のあちこちから聞こえてきた。そうした被災者自身の声から「ふるさと」の持つ本当の意味を学ぶことができた。

夏祭りは、これまでの「おだがいさまセンター」の総決算でもあった。これまで築いてきた外部の方々とのネットワークで、「櫓はうちが組むがら」、「スクリーンは俺のところがつつから」と次々に出来上がっていった。出店も、京都、新潟、東京、そして地元福島から、焼きそばにヨーヨー、かき氷、綿あめ、お好み焼き、たこ焼きの屋台が並んだ。「おだがいさまセンター」は、まさに内部のパイプと外部のパイプをつなぐ役割を果たしていった。

7. これからの被災者支援で必要なこと

冒頭に福島県の現況を述べたように、仮設に移り住んで、孤独死が増える可能性があること、借り上げ住宅は仮設よりも孤独がさらに進んでしまうこと、県外に住むと情報が入りづらいといったきわめて厳しい状況を抱えている。これらの課題を解決していくために、おだがいさまセンターの機能をさらに充実させ、交流の場の提供と自治の促進を発信しつつ、生きがいと居場所づくりへと活動を広げ続けなければと考えている。

いま、東日本大震災をとおして見えてくるのは、震災によって問題や課題が発生するのではなく、いままですその地域が抱えていた課題が、災害によって顕在化してくるのだということである。その点からも、地域の中で地域が持つ力を高める取り組みを積み重ねていくかが問われてくるのだと思う。



写真1 ビッグパレットふくしま避難所におけるサロン（3号店「つくし」）



図1 おだがいさまセンターの仕組み

【参考文献】

月刊 生涯学習 2月号 国政情報センター発行 2012年2月

「生きている 生きてゆく-ビッグパレットふくしま避難所記」 ビッグパレットふくしま避難所記刊
行委員会発行 2011年